

地域発 防災ラジオドラマE藤沢

六会天神町 地震災害編 シナリオ 第1話

地震発生 二〇一〇年一月二〇日 午前十時〇〇分

震源地 相模湾（南関東地震）

マグニチュード 七・九

天神町の震度 六

天候 晴 気温九度

課題 平時の連絡網を生かした地域の安否確認

状況設定

地震の揺れが収まってから、自宅前の道路や庭に住民が出てきて不安げに寄り集まる。その中で自主防災会の役員が、怪我をした人がいないか、家の中に取り残された人がいないか声をかけ、集まった人がそれぞれ手分けをして、近隣住民の安否確認や被害状況を調べ始めるが、アパートやマンションの住居者との付き合いがあまりなく、平日の午前中に起きた災害なので、住民のほとんどが高齢者や主婦のためなかなか情報収集がはかどらない。天神町一丁目と天神公園の間の道路が引地川まで、液状化現象で陥没し横断できない状態になり、天神小学校の校庭には児童が集まって点呼を受け全員無事が確認された。体育館の安全が確認できしだい移動する予定だ。一方、二丁目・三丁目の住民は、天神公園にやってくる。災害対策本部は、天神町会館の石段が崩れ会館も危険なため、天神社の社務所に設置された。自治会長や自主防災会役員を中心に住民の安否確認や地域の被害状況の調査を始める。

前説（ナレーション 毎回放送）

独立行政法人防災科学研究所では、災害時に地域に起きることを住民主体で考えるための方法として、地域の災害シナリオの作成を提案しています。災害シナリオは、行政が作成した各種災害の被害想定やハザードマップを下敷きに

して、地域の「より細かい事情」を勘案して、災害時に実際に起きることを時間に沿って具体的に整理して記述したものを指しています。災害シナリオは、地域の関係者が具体的に自分たちの直面する事態を考える仕組みづくりのきっかけとなるものです。シナリオにすることで、事態の展開していくイメージが掴みやすくなり、必要な対応もわかりやすくなります。

藤沢市では、これまで藤沢市立鵜沼中学校を避難所とする地区防災連絡協議会の地震シナリオ、鵜沼海岸五丁目自治会自主防災会の水害シナリオを作成いたしました。今回は六会天神町での地震シナリオに基づくドラマを放送いたします。この地域は藤沢市のやや北部に位置する閑静な住宅地ですが、昼間は多くの方が地区外に通勤通学されているため、高齢者の昼間独居が防災上の課題の一つになっています。

地域防災ラジオドラマ・イン・藤沢。六会天神町地震災害編。このドラマは地域住民の方々がワークショップで議論した内容に基づくフィクションです。

【ストーリー】

登場人物

丸山（主婦） 自主防災会 消火班

山田（主婦） 自主防災会 学童班

近隣住民

男 A 高齢者の男性

男 B 専業農家

男 C 年金暮らしの男性

女 A 老母と暮らしている中年女性

女 B 主婦

石川会長 自治会と自主防災会の会長で避難所の総括責任者

岡田副会長 自主防災会の副会長

近藤校長

中村（男性） 民生委員の妻に頼まれて名簿を届けに来る

大山（女性） 自主防災会救出救護班

河内（女性） 自主防災会救出救護班

中原（女性） 自主防災会給食給水班

和泉（女性） 自主防災会給食給水班

防災無線の声

避難者大勢の声

【ナレーション】

六会天神町は、藤沢市の中北部に位置し、日本大学の広大な敷地から引地川に向かって下ってゆく傾斜地に、昭和四十年代の半ばごろから造成が進められた閑静な住宅地です。地域の南は市には災害時の避難所となる市立天神小学校があります。天神町の中心には由緒正しく歴史のある六会天神社があり、地域の鎮守としての役割を果たしています。高い建物は少なく、多くは一戸建てか中低層のマンションやアパートからなっています。物語は、ある冬ばれの朝、庭で洗濯物を干している丸山さんに、隣の山田さんが二階のベランダから話しかけているところから始まります。

山田 「丸山さん、もうすぐ十時よ、洗濯物干し終わったらお茶しない」
丸山 「いいわねエ、田舎から送ってきた干し柿があるから持ってきてくわ」
山田 「ラッキー！おいしいのよね、丸山さんちの干し柿」
丸山 「去年の暮れまで寒さが続いたから、今年のは甘いわよ」
山田 「わあーッ！期待しちゃう！早く来てよね」
丸山 「すぐいく、お湯沸かしといて」
山田 「まかせといて、新型の電気ポットだからお待たせしないよ」
丸山 「(笑って)了解」

山田、二階から階段をトントントンと降りて、ハミングしながらお茶の用意をする。(カチャカチャと触れ合う茶碗の音)。ドアを開ける音

丸山 「山田さん、あがるわよ！」
山田 「どうぞ！」
丸山 「見てみて！これ」
山田 「真っ白に粉が吹いているのがたまないわよね、ウーン！おいしい！」
丸山 「亭主は会社で子供は学校、私たちはお茶会で命の洗濯」
山田 「干し柿たべて、のんびりできて、もう最高に幸せ！前に住んでたところは商店街だったのよ、買い物には便利だったけど人が多くて落ち着けないの。でもここは本当に静かよね」
丸山 「人通りが少なくって静かな訳知ってる？ 天神町のほとんどの人が、昼間は働きに行っているか学校に行っているかしているの」

山田 「ああッ、去年の暮れにやった防災シナリオワークショップとかなんとかでいったわ、昼間いる人は三分の一ぐらいだった」

丸山 「そうよ、昼間は私たちみたいな専業主婦と子供とお年寄りだけになっちゃうのよ、何かあったら男手が無いから動けるのは私たちだけよ」

山田 「だから自主防災会の役員にあたっちゃうんだ、私が学童班であなただけは消火班でしょう」

丸山 「そうかもね、働きに行っちゃあ、いざっていうとき間に合わないものね」

山田 「でも、三月いっぱい役員改選でしょ。残念、出番がなかったか」

丸山 「そんなこと言っちゃって、まだ二ヶ月以上あるのよ、ちよっと前に伊豆のほうで大きな地震があったばかりじゃない、油断禁物よ」

テーブルの茶碗がカタカタ鳴り出すと突然ゴーツという地鳴りとともに建具がガタガタ音を立て始める。

山田 「キヤーツ！なにになに！」

丸山 「地震よ！地震！テーブルの下に早く入って！」

二人の悲鳴と食器棚からコップや皿が飛び出して割れる音、たんすや本棚が倒れる音が響く。大きな揺れが収まり静かになる。

丸山 「収まったわ、今のうちに外に出ましよう！」

山田 「まだ揺れてるみたい」

丸山 「大丈夫よ、割れたガラスに注意して、さあ早く出ましよう！」

山田 「玄関の扉は開く？」

丸山 「開くわ、サンダルじゃだめ！靴を履いて！」

山田 「何にも持ち出せなかった！」

丸山 「そんなの後でいいのよ！命が大事なんだから！」

二人が表に出ると近所の住民も何人か道路に避難している、それぞれなすべもなく呆然としている。

「すごい地震でしたね！」「怖かったですね」「怪我はありませんか？」等々ざわざわした避難者どうしの話し声。

防災無線の「ピンポンパンポン」というチャイムの音と防災無線の声

「こちらは、防災藤沢です。ただいま地震がありました。藤沢市の震度は六強です。落ち着いて火の始末をしてください。海岸付近にいる人は、津波の恐れがありますので安全な所に避難してください。今後のテレビ・ラジオの情報に十分注意してください。」(二回繰り返す)

丸山 「アッ！伊藤のおばあちゃん一人暮らしなんだ！見てこなくっちゃ！」

山田 「一人じゃ危ないわ、皆に協力してもらいましょう」

丸山 「そうね。皆さん！ちよっと集まってください！」

避難者、がやがやいいながら集まってくる。

山田 「皆さん、余震が来る前に、ご近所の方々の安否を確認したいんです。

手分けをして声をかけて回ってください。それと、一人暮らしのおばあさんがいるんです、誰か一緒に来てください」

住民男A 「伊藤のおばあちゃんか？茶飲み友達だからなわしがみてこよう」

丸山 「おねがいします。それから、ガス漏れがしていないか、火が出ていないか、道路の被害状況も確認してください」

住民男A 「わかった。出会った人にも協力してもらおうよう話すよ」

住民男C 「安否確認や被害状況の情報は何処に知らせるんだ」

山田 「天神町会館が対策本部になるはずですが、そこに行ってください」

住民男B 「マンションやアパートはどうする、一部屋ずつ確認するのか？」

住民男C 「鍵がかかっていたら壊してはいるのか？」

住民女B 「普段お付き合いないから、部屋の中までは入れないわ」

山田 「声をかけるだけでいいんじゃない」

住民男B 「それじゃ安否確認にならないだろう」

住民女B 「中で気を失って倒れているかもしれないし」

丸山 「ともかく今出来ることしましょうよ」

住民女A 「(イライラしながら) 私のうちは大丈夫そうだから中に居ます、外は寒いし母は年寄りなので」

丸山 「安全が確認できるまで、天神町会館か学校に避難したほうがいいですよ」

住民女A 「母は足が悪いです、そんなとこまで連れて行けません」

丸山 「それじゃ余震が来たときすぐに逃げ出せるような所に居たほうがいいですよ」

住民女A 「わかりました、そうします」

山田 「丸山さん、私、学童班だから小学校に行かなくちゃ、子供たちは無事かしら、心配だわ」

消防車等緊急車両のサイレンの音、遠くに聞こえる
伊藤さんのところへ行っていた住民男Aが戻ってくる

住民男A 「おう、伊藤さんとは本人も家も大丈夫だ。しかしな、天神公園前のバス通りが陥没していてな、二丁目のほうには渡れないぞ」

住民男B 「たいへんだ！早いとこ、一丁目の被害状況を把握しよう」

住民男C 「さあ皆！手分けをして始めよう！」

住民男A 「一丁目の災害本部は小学校にしよう、あそこには防災倉庫があるから必要な機材がそろっているはずだ」

丸山 「そうしましょう。山田さんは学校に行って道路が陥没していることを伝えて、それから校長先生と相談して、特養老人ホームのほうから日大前を通って二丁目・三丁目に帰れる道がないか調べてくれる」

山田 「いいわ。で、丸山さんは？」

丸山 「私は防災倉庫にあるハンドマイクかトランシーバーを使って、対策本部の石川会長と連絡を取るようになるわ」

山田 「了解。さつき自主防災会の班員として、出番が無いなんて言ってたけど取り消すわ」

丸山 「了解。これからが大変よ、がんばろうね！」

【ナレーション】

天神町会館の石段が崩れ、会館自体も安全が確認できないことから、念には念を入れて、天神公園の防災倉庫から機材を運び出し、防災本部を天神社の社務所に設置することになりました。各組長から報告されてくる町内住民の安否確認と被害状況を石川会長達がまとめていますが、一丁目との連絡が取れないのでどうしようかと話し合っています。天神公園には次第に状況を知りたいと避難してくる人が増えてきています。（遠くで消防車等のサイレンの音）

石川会長「岡田さん、まだ一丁目の組長と連絡が取れないのか？学校はどうなっているんだ？校庭の防災倉庫は誰も開けないのかな」

岡田副会長「トランシーバーに応答が無いですね、チャネルが合っていないのか、使い方が分からないのか……。携帯電話も使えないし……。人の姿は見えませんからハンドマイクで呼びかけてみましょうか？」

石川会長「何でもやってみてくれ、それから、ほかの役員に言っておいて、学校まで行ける道が無いか調べてくれ。災害の報告はどうなっている」

岡田副会長「町内で一番被害が大きいのは、一丁目のバス通り沿いと看護学校の裏側が引地川まで陥没している所ですね。今のところ火災は発生していませんし、死亡や怪我人も報告されていません。二丁目・三丁目には古い家が少ないから家屋の被害はあまり無いようです」

石川会長「やっぱり藤沢市の地震影響圏にあったように、液状化現象が起こったんだな。陥没したところは昔は谷戸で引地川の湿地帯だったところだからな。昭和四十六年からの宅地造成で埋め立てて今の住宅地になったんだ。三十年以上たってるんだから、地盤はしっかりしていると思っただろう。一丁目のバス通り沿いはかなり酷い状態だ、閉じ込められている人がいなければいいんだが」

中村「会長、民生委員の中村です。女房に言われて名簿を持ってきました」

石川会長「ああ、中村さん、ご苦労様。お宅は大丈夫でしたか？」

中村「家は大丈夫ですが中は滅茶苦茶ですわ。でも怪我人はいません」

石川会長「それはよかった」

中村「ラジオで言ってましたが、震源地は相模湾で関東大震災と同じくらい
の地震だそうですね」

石川会長「私も聞きました。災害本部のある市民センターならもう少し詳しい情報が入ると思います。私も、ここが落ち着いたら行かなければならない」
中村「町内と防災の両方の会長をされているから、大変ですね。そうだ、女房は、ほかの民生委員や福祉事務所からの連絡があるので、老人会館のほうで待機しているっていつてました」

石川会長「わかりました、名簿に乗っている人の安否を確認して、何かあったら会館へ知らせます」

岡副会長「会長！無線が通じました！小学校の近藤校長からです」

石川会長「よし、貸してくれ！えー、こちら会長の石川です、そちらの状況を知らせてください。どうぞ！

近藤校長「こちら校長の近藤です、生徒たちは全員無事です、怪我人はいません、今先生方が体育館の状態を調べています、安全が確認されしだい移動します。どうぞ」

無線機の周りに集まっている人たちから「わーっ」と歓声が上がる。

石川会長「子供たちは全員無事なんです！了解しました。なお、地域住民の情報は何かありませんか？どうぞ」

近藤校長「はい、自主防災会の丸山さんと山田さんが組長さんたちと一丁目の住民の安否確認をしています。こちらに一時避難してくる住民の方は増えてきています。切り傷や打撲を負った人が数人きましたが、保健室で手当てをしました。重傷者は今のところ居ません。どうぞ」

石川会長「わかりました、学校のほうは避難所として開設できそうですか？どうぞ」

近藤校長「はい、藤沢市役所から地域担当の波島さんがこちらに向かっているそうです。到着しだい本格的に対応しようと思います。その前に保護者の方にお子さんを迎えに来てもらいたいのですが、通学路が通れないとのことなので、日大のほうを通るルートを調べに行っています。どうぞ」

石川会長「こちらでも調べに行っています。通路が確保出来次第迎えにいけるよう手配します。どうぞ。岡田さん、代わってくれ」

岡田副会長「近藤校長！副会長の岡田です、チャンネルはかえないで誰か通信係りを決めて、常時連絡が出来るようにしておいてください。どうぞ」

近藤校長「はい、了解しました。どうぞ」

石川会長「岡田さん、公園に集まっている人たちに、状況を説明してくる。そ

れから私は六会地区全体の責任者になっているので、災害拠点の市民センターに行かなくてはならないから、あとのことは役員さんたちと相談してやってください」。

大山 「会長、何か手伝うことがあればって、集まっている人たちがいます。防災会の各班に参加してもらっていいですか」

河内 「私のほうには、家に戻っていいかって言ってきているわ」

中原 「食べ物をとってくるって、家に帰っちゃてる人がいるわよ」

和泉 「水道が止まっているから、飲み水の心配している人もいるし」

石川会長 「今行つて説明するよ、皆はここにきている各班長や役員を集めてくれ。岡田さん、この下の佐川工務店まで行って重機が使えるかどうか確認してきてくれないか、使えるようなら天神公園から田島公園に行けるよう、仮設道路を作るよう頼んでくれないか」

岡田副会長 「わかりました、トランシーバーは一台置いてゆきます、誰か操作できる人いますか」

大山 「私できます」

岡田副会長 「じゃあ、お願いします。会長、行ってきます、結果は無線で知らせます」

石川会長 「何をするにも安全を確認して事故の無いようお願いしますよ」

岡田副会長 「はい、わかりました」

石川会長 「さあ、行こうか」

役員一同 「はい」

避難者してきた住民のざわざわした声 子供の泣き声も聞こえる、消防車・救急車・パトカーなど緊急車両のサイレンが入り混じって鳴り響いている

石川会長 「(ざわざわした声にまけないようにハンドマイクで話す) みなさん！私は自治会長の石川です。みなさん！ちよつと聞いてください！今日の地震は相模湾を震源地にした関東大震災規模の大型地震だそうです、藤沢市や近隣の詳しい被害状況はまだ分かりませんが、天神町の被害は、ここから一部が見えるように道路が崩れているところがあります。天神小の児童は全員無事だそうです」

大山 「会長、今無線で日大前の道路を通れば学校に行けるそうです」

石川会長 「わかった。みなさん！今入りました情報では、日大前の道路を通つて迂回すれば学校に行けるそうです。父兄の方はお子さんを迎えに行つて

あげてください。また、各組長からの報告では、倒壊した建物は少ないというのですが、家に入るのは、自分だけの判断ではなく、近所の人など複数の目で、外見や内部を調べて安全を確認してから入ってください。大きな余震が来ることも予想されますから、少しでも危ないと思ったら、小学校に避難してください。現在は電気・ガス・水道は止まっています。復旧するまで、電気は二日か三日程度、ガスは安全が確認されるまで相当日数がかかります。水道は一週間程度断水するでしょう。でも安心してください、皆さんの飲み水は、この天神公園の地下の耐震貯水槽に確保してあります。しかし限りある水ですから、節水して大切に使用してください。最後におねがいします。この災害から立ち直るまでには、多くの問題と長い時間がかかるでしょう、町内会や防災会の役員だけでは対処出来ません。それには皆様のご理解とご協力が必要です、どうかそれぞれの班に参加していただいて、一日でも早い天神町の復興に、皆さんで力を合わせてがんばりましょう」

ストーリー1終わり

住民からの大きな拍手と「参加するぞ」「がんばるぞ」等々の声が沸きあがる遠くで報道機関等のヘリコプターが数機飛び交う音、消防車・救急車・パトカーなど緊急車両のサイレンが入り混じって次第に大きくなる

このドラマは住民はじめ行政など地域のさまざまな関係者が協力して災害時に想定される事態や対応について話し合い創作されたフィクションです。ドラマのシナリオづくりの過程では、地域社会の実態を調べ、かつ、行政の防災計画や防災体制、被害想定、ハザードマップ、マニュアルなどの公式な情報を参考にしていますが、社会的なシミュレーション（模擬演習）として、また、今後の改善の視点を盛り込むなどの理由から意図的に事実と異なる設定をしている場合があります。（以下参照）

● 六会天神町には、平時の連絡網として存在する自治会の班組織があります。またこれとは別に住民有志による自主防災組織が結成され、活動を行っています。また六会地区では各地区の防災組織が連帯して活動している六会防災リーダー会が結成されています。

ることが地域の大きな特徴となっています。六会防災リーダー会は各町内の自主防災組織からメンバーが選抜されて六会地区全体の防災訓練や防災講習などの取り組みを行っており、実際の災害時には地域連携にも何らかのかかわりが出てくると思われるますが、今回のドラマは天神町という単一町内会での取り組みに絞ったものとしたため、六会防災リーダー連絡会の活動については描かれておりません。

● 第2話では高齢者を一時的に収容する施設として関係者が老人会館に詰めるというエピソードが語られますが、老人会館は実在の施設ではありません。また天神小学校に隣接するグリーンライフ湘南という特別養護老人ホームが登場します。こちらは実際に存在する施設で、ドラマの中で語られている通り六会地区の防災訓練にも参加され、人的交流が図られています。地域的には六会地区ではなく南側の善行地区に所属します。災害時に地域の福祉施設と連携を図るために何をしておくべきかは、今後重要な課題として地域で検討されることになっています。

地域発 防災ラジオドラマE藤沢

六会天神町 地震災害編 シナリオ 第2話

地震発生から三日後 二〇一〇年一月二三日

自主防災組織の災害対策本部 天神町会館

時間 午前十時頃

気温 九度 晴

課題 災害時要援護者の地域支援

状況設定

被災から三日後、地域住民も復旧に向けて動き出しました。被災程度が比較的大きかった住民の中に、家族の介護を必要としている人がいます。平時に利用しているデイケア事業施設が被災により一時的にサービスが受けられなくなりました。家族も震災という非常事態とはいえ、長期間仕事を休むわけには行かない状況です。何とか地域で支援できないか、町内会の役員が集まって相談をしています。

前説（ナレーション 毎回放送）

独立行政法人防災科学研究所では、災害時に地域に起きることを住民主体で考えるための方法として、地域の災害シナリオの作成を提案しています。災害シナリオは、行政が作成した各種災害の被害想定やハザードマップを下敷きにして、地域の「より細かい事情」を勘案して、災害時に実際に起きることを時間に沿って具体的に整理して記述したものを指しています。災害シナリオは、地域の関係者が具体的に自分たちの直面する事態を考える仕組みづくりのきっかけとなるものです。シナリオにすることで、事態の展開していくイメージが

掴みやすくなり、必要な対応もわかりやすくなります。

藤沢市では、これまで藤沢市立鵜沼中学校を避難所とする地区防災連絡協議会の地震シナリオ、鵜沼海岸五丁目自治会自主防災会の水害シナリオを作成いたしました。今回は六会天神町での地震シナリオに基づくドラマを放送いたします。この地域は藤沢市のやや北部に位置する閑静な住宅地ですが、昼間は多くの方が地区外に通勤通学されているため、高齢者の昼間独居が防災上の課題の一つになっています。

地域防災ラジオドラマ・イン・藤沢。六会天神町地震災害編。このドラマは地域住民の方々がワークショップで議論した内容に基づくフィクションです。

【ストーリー】

登場人物

石川会長 町内会と自主防災会の会長で避難所の総括責任者

岡田副会長 自主防災会の副会長

中村（女性） 民生委員

大山（女性） 自主防災会救出救護班 天神町会館勤務

河内（女性） 自主防災会救出救護班 天神町会館勤務

鍛冶山（女性） 町内会の会計

【ナレーション】

震災から三日たって、徐々に被害の全体像もわかってきました。天神町では被害がそれほど無かったものの、藤沢中心部や湘南地方では大きな被害のところもあり、各地で災害対応の活動が始まっています。

このような状況の中で天神町でも、介護者を抱えた住民の方に、対処の難しい事例が出てきました。平時は利用できていた介護施設が、震災のため利用できなくなり、どうしたらいいだろうという相談が自治会長のところを持ちかけられます。急遽自治会の役員と民生委員が天神町会館に集まって相談することになりました。

大山 「少しは片付いたかな」

河内 「ほかの集会所はたいしたことないけど、給湯室は酷かったわね」

大山 「食器棚が倒れちゃったからね、湯飲茶碗は買い足さなくちゃ、それとポットも中が割れているのがいくつかあるし」

河内 「会館の被害がたいしたことなくてよかったわよ」

大山 「工務店さんが応急処置してくれたからね、割れた窓ガラスにはビニールシート、崩れた石段には仮設階段、しばらくはこのままね」

河内 「しようがないわよ、でもここが使えるのは助かるわ、必要なものはみんな揃っているんだから」

大山 「河内さん、今日の会合には何人くらい集まるの」

河内 「会長さんは、はっきり言わなかったけれど、役員はせいぜい五、六人じゃない、そうだと中村さんもくるって」

大山 「中村さんて民生委員の？」

河内 「そうよ」

大山 「何の話なんだろう？」

河内 「分かんない。昨日から電気と水道が使えるようになって助かるよね」

大山 「昨夜は久しぶりにお風呂に入ってさっぱりした。それに夜、明かりがつくとホッとするよね」

河内 「懐中電気やローソクじゃ気持ち落ち込んじゃう」

大山 「でも、皆が一部屋に寄り集まって、家族の絆が深まったって感じ」

河内 「うちもそうだった、こういう災害に遭うと子供たちも家のことを率先して手伝ってくれて、すごく協力的なのよね」

大山 「地震はいやだけど、この思いやりは続いてほしいわよね」

河内 「のどもと過ぎれば何とかで、すぐ自分の部屋でテレビゲームよ」

大山 「ウーン、それが現実か」

石川会長と岡田福会長がやってくる。ガラガラと引き戸の開く音

石川 「ごくろうさん、すっかり片付いたね、自分のうちの方はどうなの」

河内 「まだまだですよ。窓の枠が少しゆがんじゃって。後はたいしたことは無いんだけど、大工さんが来てくれなくて。ここの集會室はざっと掃除しときました」

岡田 「ありがとう、机といすは僕らが並べるからいいよ」

大山 「役員さんは何人くらい見えますか？」

石川 「会計の鍛冶山さんと民生委員の中村さんだ」

大山 「四人だけですか」

石川 「いや、大山さんと河内さんにも参加してもらいたいんだ」

河内 「私たちですか？」

大山 「何の話なんですか？」

石川 「皆集まったところで話すよ。ああ、来たようだ」

鍛冶山 「遅くなりました」

中村 「二時からでしたよね」

石川 「ええ、私達も今来たところです」

岡田 「さあ、席についてください」

石川 「二人もこっちに来てくれないか」

大山 「はい」

河内 「今お茶を持って行きます」

椅子を引いて席に座る音、湯飲み茶碗を配る音

中村 「会長さんも大変でしょう、ご自分の家のほうは大丈夫なんですか」

石川 「私が居なくても、ほかの者がやってくれますから。中村さんだって老人會館に詰めつきりだったでしょう」

中村 「私のところはほとんど被害がありませんでした、防災対策しといたんですよ、家具を止めるとか、ガラスにフィルムを張るとかして」

岡田 「家もやってみました。かなり効果ありますよね」

鍛冶山 「自主防災会からよくお知らせが回ってきましたものね、あれで対策をとっている人は大勢いると思いますよ」

石川 「ほかと比べると天神町は、引地川沿いの地盤が緩くてね。昔造成で埋め立てた谷戸の所が崩れた以外、これといった大きな被害は起きていないようだ」

中村 「で、今日私が呼ばれたのは何の話なんですか」

石川 「実は、町内で、家族の中に介護を必要としている人がいる方から相談がありました、ほかにも何軒か同じような家族がいるようなので、中村さんのご意見を聞いて、皆さんのお知恵を拝借しようと思ったんです」

中村 「具体的にはどのようなことなんですか」

石川 「今まで利用していたデイケア施設が被災してサービスが受けられなくなっただろうだ、他にも、ヘルパーさんがこれないので困っているお年寄りや寝たきりで介護の手伝いが必要な家庭がある。地域で何か支援ができないかということなんだ」

中村 「独居老人については、私も見回りして声をかけたりしているんですが、状況によっては老人会館のほうで一時引き取ろうかという話も出ていますが、今はこの状態で職員も足りないし無理なんですよ」

岡田 「家族はいるんでしょ、ショートステイやデイケアが利用できるまで、しばらくは家族が面倒見るよりしようがないでしょう」

石川 「共働きなんだよ、このご時勢だから長期間仕事を休むと解雇されちゃうそうだし」

鍛冶山 「それを地域で面倒看ろって言うのは難しいわよ」

大山 「市の方で応急救護施設があるんじゃないの、そこに頼んだら」

石川 「そこは市が指定している特別養護老人ホームなどの福祉避難所や小学校や市民センターの避難施設の中を仕切って作った臨時の救護施設なので、そこに避難している家族でなくちゃいけないんだよ、自宅で避難している人がデイケアがだめだからって言う理由で避難所に収容するのは無理だよ」

河内 「災害時には、他の市でも受け入れてくれるって聞いたことがあるわ」

中村 「それは集団疎開みたいなものなのよ、三宅島の噴火のとき島民が全員で東京都に避難したでしょ、他のところに親類があればそこに移るとか」

鍛冶山 「大災害になっちゃうと、全体が落ち着くまでは個人の対応になっちゃうんだ」

石川 「そう、自分のことは自分がやる、それが当たり前なんだが、個人で対応することには限界がある。だから、一軒でだめなら隣組でそれがだめなら町内でって思っているんだ。理想論かもしれないけど」

岡田 「行政が出来ないなら地域で、地域がだめなら町内会で出来ることがないかって言うことですよ」

石川 「まあ、そういうことだな」

中村 「会長の気持ちは分かりました。では具体的に例を挙げて、私たちに何が出来て何が問題か列挙して見ましょう」

鍛冶山 「それがいいわ、中村さんはこの町内の要援護者のことを知っているんですもの」

中村 「私が把握している中でってことよ、名前は言わないわ」

石川 「それでいいですよ。個人情報時代ですからね」

中村、かばんを開けて資料を出し、ページをめくる音

中村 「まず一人暮らしのお年寄り、体力的に弱っているけど身の回りのことは自分で出来る人ね。結構いるわよ」

大山 「買い物に行くとき、必要なものを聞いて買ってきてやるとか」

河内 「時々様子を見に行きながら、話し相手になってあげるってのはどう？」

中村 「では、認知症の人」

大山 「あたし徘徊しているおじいさん知ってる。家族が探しているから見かけた時は、何処そこに居たよって教えてあげるの」

河内 「私知っているのは、食べたことをすぐ忘れちゃうおばあさん。「嫁が何にも食べさせてくれない」って、近所に触れ回っているの、お嫁さん泣いていたわ」

鍛冶山 「どっちも悲惨だけど、私たちに何が出来る」

大山 「知らない人が声をかけると怒るのよ、だから家の人に連絡してあげるくらいかな」

河内 「おばあさんも同じ、「そんなこと無いでしょ」なんていったらもう大変。

だからお嫁さんに、「分かっているわよ」って声かけるくらいかな」

岡田 「プライベートなことだからな、あんまり近所に知られたくないと思っているだろうし、デリケートな問題だね認知症は・・・」

中村 「誰にでもその可能性はあるのよ」

中村、咳払いをして、ページをめくる音

中村 「では、次は知的障害者や重度の身体障害のある人ね」

鍛冶山 「これも難しいわね、車椅子の乗り降りやトイレの世話もあるでしょ」
大山 「これは専門家に頼むしかないでしょう」

河内 「専門家ってヘルパーや看護師さんでこと、何処から来てくれるの」

大山 「ボランティアセンターよ、資格のある人を派遣してもらうの」

岡田 「普段付き合いの無い人やボランティアでも、知らない人は受け入れにくいかも」

鍛冶山 「障害者の人は、見慣れない人に介護されると怖がる人がいるかもしれないわね」

石川 「信頼関係が一番大事だろうな、身体が思うように動かせないんだからイライラするだろうし不安もあるだろうから、ストレスがたまるしね」

岡田 「それより、介護に伴う事故が怖い、責任を問われるような事になったら問題だ」

石川 「岡田さんの言うこともつともだね。素人には責任が重過ぎるかなあ。資格のあるボランティアだとしても同じ人がずっと面倒を看てくれるわけじゃない、ボランティア活動は二・三日、長くて一週間で交代だ、障害者も家族も気疲れしてしまうだろう」

大山 「でも、何かボランティアをうまく活用する方法は無いかしら」

河内 「支援をする人を一箇所に集めてしまうて言うのはどうかしら」

鍛冶山 「この会館だったら和室があるし台所もあるから」

岡田 「だめだよ、表の階段は仮設だし、和室は二階だぞ」

鍛冶山 「そうか・・・。あつ、天神小学校の一階は障害者の人でも入れるようになっっているわ」

石川 「小学校は災害避難施設になっているんだよ」

鍛冶山 「だめか・・・一箇所に集まればボランティアの人たちの引継ぎがうまくいくと思っただけだな」

石川 「今すぐには間に合わないけど、地域でボランティアコーディネーターを育成しようとしているんだ、現在六会だけでまだ五十数名しかいないんだけど」

中村 「で、この問題は？」

石川 「障害者の問題は簡単じゃないね。でも地域で出来ることを考えていう。何とか良い解決策が見つかるさ」

中村 「では、寝たきりのお年寄り」

鍛冶山 「特養老人ホームにお願いしたら。ほら、小学校の近くにあるじゃないグリーンライフ湘南」

岡田 「ああ、あそこは協力してくれるだろう、防災訓練にも参加してくれるし、理事長も知り合いだからね」

河内 「これは、普通のときでも福祉事務所の仕事でしょ。寝たきりで一人暮らしなんて誰が普段面倒看てるの？あれ、これって会長さんに相談してきた人のこと」

中村 「私は知りませんよ、でも、もしその人なら受け入れ期間を決めて特養のグリーンライフ湘南に相談するのがいいと思う、そのときは町内会長が口ぞえしてね」

石川 「それが結論ですか。はい分かりました、早速そうしてみますよ」
参加者一同 「笑う」

石川 「今日は忙しい中お集まりいただき、貴重な意見をありがとうございます。また、まだまだ何かと問題が起きるだろうと思います。その時はまた相談しますのでよろしく頼みます」

皆で後片付けをする、机やイスをたたむ音、茶碗を片付ける音等々
片付けの合間にそれぞれ近況や災害当時の雑談を交わす
明るい感じの音楽が流れてくる

このドラマは住民はじめ行政など地域のさまざまな関係者が協力して災害時に想定される事態や対応について話し合い創作されたフィクションです。ドラマのシナリオづくりの過程では、地域社会の実態を調べ、かつ、行政の防災計画や防災体制、被害想定、ハザードマップ、マニュアルなどの公式な情報を参考にしています。社会的なシミュレーション（模擬演習）として、また、今後の改善の視点を盛り込むなどの理由から意図的に事実と異なる設定をしている場合があります。

● 六会天神町には、平時の連絡網として存在する自治会の班組織があります。またこれとは別に住民有志による自主防災組織が結成され、活動を行っています。また六会地区では各地区の防災組織が連帯して活動している六会防災リーダー会が結成されていることが地域の大きな特徴となっています。六会防災リーダー会は各町内の自主防災組織からメンバーが選抜されて六会地区全体の防災訓練や防災講習などの取り組みを行っています。実際の災害時には地域連携にも何らかのかかわりが出てくると思われる。六会防災リーダー連絡会の活動については描かれておりません。

- 第2話では高齢者を一時的に収容する施設として関係者が老人会館に詰めるというエピソードが語られますが、老人会館は実在の施設ではありません。また天神小学校に隣接するグリーンライフ湘南という特別養護老人ホームが登場します。こちらは実際に存在する施設で、ドラマの中で語られている通り六会地区の防災訓練にも参加され、人的交流が図られています。地域的には六会地区ではなく南側の善行地区に所属します。災害時に地域の福祉施設と連携を図るために何をしておくべきかは、今後重要な課題として地域で検討されることになっています。

ストーリー2終わり

地域発 防災ラジオドラマE藤沢

六会天神町 地震災害 シナリオ 第3話

地震発生から一週間後 二〇一〇年一月二十六日

自主防災組織の災害対策本部 天神町会館

時間 午後二時頃

気温 十三度 晴

課題 地域資源の活用・地域にあるボランティアとの連携

状況設定

被災から一週間後、被災地には全国各地からボランティアが到着しています。六会地区も被害程度は軽微ですが、市外からのボランティアと、地区に隣接する大学生のボランティアからの支援の申し出が来ています。

ボランティアによる災害救援の経験が無い人たちからは、色々支援を頼むことに不安を口にする人も出てきています。

地域のニーズにマッチしたボランティア活動が被災者への効果的な支援につながるので、天神町町内会長は、ボランティアと地域の被災者を上手に結び付けるには何をすればよいか役員や自主防災会の班員を天神町会館に招集して意見を聞くことにしました。

前説（ナレーション 毎回放送）

独立行政法人防災科学研究所では、災害時に地域に起きることを住民主体で考えるための方法として、地域の災害シナリオの作成を提案しています。災害シナリオは、行政が作成した各種災害の被害想定やハザードマップを下敷きに

して、地域の「より細かい事情」を勘案して、災害時に実際に起きることを時間に沿って具体的に整理して記述したものを指しています。災害シナリオは、地域の関係者が具体的に自分たちの直面する事態を考える仕組みづくりのきっかけとなるものです。シナリオにすることで、事態の展開していくイメージが掴みやすくなり、必要な対応もわかりやすくなります。

藤沢市では、これまで藤沢市立鵜沼中学校を避難所とする地区防災連絡協議会の地震シナリオ、鵜沼海岸五丁目自治会自主防災会の水害シナリオを作成いたしました。今回は六会天神町での地震シナリオに基づくドラマを放送いたします。この地域は藤沢市のやや北部に位置する閑静な住宅地ですが、昼間は多くの方々が地区外に通勤通学されているため、高齢者の昼間独居が防災上の課題の一つになっています。

地域防災ラジオドラマ・イン・藤沢。六会天神町地震災害編。このドラマは地域住民の方々がワークショップで議論した内容に基づくフィクションです。

【ストーリー】

登場人物

石川会長 町内会と自主防災会の会長で避難所の総括責任者
岡田副会長 自主防災会の副会長
大山（女性） 自主防災会救出救護班 天神町会館勤務
河内（女性） 自主防災会救出救護班 天神町会館勤務
鍛冶山（女性） 町内会の会計
丸山（男性） 自主防災会消火班
中原（女性） 自主防災会給食給水班
和泉（女性） 自主防災会給食給水班
山田（女性） 自主防災会学童班

【ナレーション】

震災から一週間がたち、天神町も落ち着きをとりもどしてきました。被災地各地での復旧活動も軌道に乗り始めましたが、一方で被害の程度が大きい世帯や高齢者だけの世帯では、後片付けが思うように進まず、ばらつきがはじかっています。

自治会長はブロック塀の片付けや家の中の整理など、外部ボランティアの支援も受け入れることを考えていますが、住民の中にはボランティアという存在が良くわからず、なんとなく不安だったり、遠慮しているのではないかと思われるふしがあります。そこで、災害時から町内の被災者に接してきた役員や自主防災関係者と相談して、ボランティアをもっと知ってもらい、利用してもらうことについて話し合いをすることになりました。

石川 「震災から一週間、ご自分の家庭も被災していらっしやるのに、町内のために尽力を尽くして活動していただきました皆さんには、本当にお礼を申し上げます。ありがとうございました。

このたびの地震は、相模湾を震源地とした大型地震で、マグニチュード七・九だそうです。湘南一帯では地盤の悪い所を中心に壊滅的な被害が出ているそうです。藤沢市も駅前の繁華街をはじめとして南部を中心に相当の被害が出ています。正確な数字はまだわかりませんが、今朝のテレビでは、昨日現在で死者は千人を超えたようです。重軽傷者も相当の数になるでしょう。まだまだ被害は増えるかもしれません。皆さんご存知の通り天神町は引地川から一丁目のバス通り沿いが崩れて、倒壊はしないまでも建物の大きな被害がありました。今も十世帯が避難施設の小学校で生活していますが、この会館も石段が壊れ仮設の階段で出入りしていますが、他の地域に比べて死亡者も無く軽傷者が十数人、火災はゼロで被害を最小限に抑えられたことは本当に良かったと思います。住民の地震に対する備えがあったことは、日ごろから防災の啓発活動に努めていただいた役員の方々の努力の賜物と感謝いたします。

さて、今日お集まりいただいたのは、いまだに後片付けが出来ないでいる高齢者だけの家や避難所生活をしている方々への支援が遅れていることです。しかし、これ以上皆様方に負担をおかけするわけにも行きませんので、ボランティアの要請をしたいと考えています。色々と心配する方もい

ることは承知しておりますが、効果的な支援が出来るよう皆さんで問題点を検討していただきたいと思い、お集まりいただいたわけです」

岡田 「確かに、復旧の遅れている方がいるのは確かですが、声をかけても「大丈夫です」と言われるので、詳しい状況が把握できてないんですよ」

大山 「遠慮しているんじゃないの」

河内 「そうよね、みんな程度の差はあるけど、被害を受けているんだもの、今は自分たちのことで精一杯なのよ」

鍛冶山 「私たちは役員だから、町内に気を配っているけど、それでも限界はあるわよね」

丸山 「妻は家の中の整理をしているものですから、今日は私だけしか出席できないで申し訳ない」

山田 「そんなこといわないで！榎田さんはご夫婦で、震災の日から二日も三日も一丁目の被災者の手伝いしていたじゃない、自分のところは後回しにして」

丸山 「それはどの役員さんも同じですよ」

石川 「役員の方々には本当にご苦勞をおかけしています。私もそうですが、皆さんもそれぞれにまだ何か出来るはずだ、という気持ちはもっていると思いますよ」

岡田 「人手が足りないんですよね、だから会長が言われるとおりボランティアをお願ひしたほうがいいです」

中原 「私、ボランティアのことはよく知らないんですけど、何処に頼むんです」

石川 「災害が起きると、市役所本庁舎にボランティア支援センターを設置するんだ」

和泉 「市役所の本庁舎まで行かなくちゃだめなんですか」

石川 「いや、地区の活動拠点として六会市民センターにも受付窓口が設置される」

中原 「そこに頼みに行けばいいんですね」

岡田 「個人で頼むより、地域で被災者のニーズを把握して効率よく派遣してもらおう方がいいんだ。ばらばらにいったんではなかなかね」

丸山 「まとめるとなると、支援に対する要望の交通整理が必要だな」

大山 「聞き取りするの？アンケートとか配って、回収するとか」

河内 「配ったり回収したりは大変よ。大体そんな時間が無いかも」

鍛冶山 「回覧板で周知したら」

大山 「今、回覧板なんか見てる暇ないんじゃない、普段だって回ってくるのが遅いんだもの」

中原 「聞き取り調査は誰がやるの」

河内 「支援を書いてもらう用紙を配るのは組長さんをお願いしたらどうかしら、自治会館に回収箱を置いておいて希望者が自分で用紙を入れるの」

大山 「どちらの調査方法でも遠慮して本当のことは書かないんじゃないかな」

丸山 「用紙に被害状況と家族構成を記入するようにすれば、ボランティアは要らないといっても、こちらで状況判断できるんじゃないか」

石川 「最近は個人情報とか言って、なかなか書かないんじゃないかな」

山田 「そういう人に聞き取り調査するのよ、届出方式じゃ出さない人の状況は判断できないわ」

中原 「地域の人たちに、そもそもボランティアの支援があるってことを知ってもらうことが大切じゃない」

和泉 「そうよね、支援の内容っていうか、メニューみたいなものをアンケート用紙と一緒に配ればいい」

鍛冶山 「ボランティアの人は専門家なんでしょ」

石川 「専門家もいるけど、学生や一般の人たちも大勢いる」

鍛冶山 「まるつきり知らない人が来るの」

中原 「それだと家財の片付けや身の回りの世話をしてもらうのは心配よね」

和泉 「そういえば何処だかの震災地で、片付けてやるって荷物をトラックで持っていった人がいたって聞いたことがあるわ」

河内 「ひどいわね、人の弱みに付け込んだ犯罪じゃない」

鍛冶山 「手伝いに来てくれた人に、気をつけなくちゃならないなんて、いやよね」

中原 「善意で来てくれるんだらうけど、やっぱり気を使っちゃうわよ」

和泉 「高齢者の世帯じゃなおさらよ、十時と三時にお茶を出さなきゃいけないなんて思っちゃうだらうし」

鍛冶山 「あれやって、これやって指図するなんて出来ないかもしれない」

山田 「悪いほうばかり考えてちゃだめよ、テレビで見た被災地のボランティア活動はとても喜ばれていたわよ」

中原 「テレビはいいとこばかり映すのよ」

和泉 「そう、食糧の配給をしたり、救援活動をしているとことか。でも・・・、ともかくボランティア活動の事が良くわかんないのよね」

大山 「ボランティアの組織のことを言っているの、それとも支援の内容のことなの」

和泉 「ボランティアっていう言葉は知っているけど、具体的に何処の誰が何をするのかってところがね」

石川 「全国から善意の人が支援に来てくれるんだ。藤沢市ではボランティア

センタを設置してそこに登録してもらおう、そして資格や技術、力仕事や話し相手など、それぞれの得意分野で被災者の手助けをしてくれるんだ」

大山 「市がやっているんなら、何か身分証明書みたいなものがあるんでしょ」

石川 「いや、市がやっているたって、公務員じゃないんだから」

丸山 「地元の人が参加している支援組織はないんですか」

石川 「六会地区には、市と協力している藤沢災害ボランティアネットワークの災害救援ボランティアコーディネーター養成講座を受講した資格者がいて、外部からのボランティアと地域のニーズをうまく結び付けることになっているんだ。岡田さんもメンバーだよ」

岡田 「市が設置しているボランティア支援センターでは、受付・登録名簿を作成した上で被災者のニーズに合わせて人材を派遣しますから、身分の確認は出来るはずですよ」

河内 「じゃあ、心配ないわよね」

大山 「私たちは支援に来てくれた人たちを歓迎すればいいのよ」

和泉 「食事や飲み物は派遣を頼んだうちが出すの」

中原 「それだと大変よね」

鍛冶山 「その人たちの謝礼は、いくらぐらいかかるのかしら」

中原 「頼む仕事によるんじゃない」

和泉 「こんな時に個人で出せるお金なんか無いわよ」

山田 「アルバイトで来るわけじゃないんだから、食事なんかのことは支援センターかボランティアネットワークでやってくれるでしょ」

鍛冶山 「ボランティアネットワークっていうところには、自治会として賛助金か協力金みたいなものを払うんですか」

岡田 「そんなことはないよ、ボランティアは自分で食事は用意するし、ネットワークにお金を払う必要は無いんだ」

中原 「全て無料の勤労奉仕なんだ」

和泉 「古いわね、勤労奉仕なんて戦時中みたい。それじゃあ若い人が来るなら学徒動員ね（笑う）歳が分かっちゃうわよ」

石川 「アッそうだ、学徒動員だ」

和泉 「いやだあ、会長、学徒動員ですよ」

石川 「いやいや、日大のほうからね、「町内で必要なら学生を動員してお手伝いします」って言われたんだ」

中原 「それで学徒動員なのね」

岡田 「いいじゃないですか、日大生なら地元だし」

大山 「学生寮や近所のアパートにいる子達は顔見知りが多いし」

丸山 「学生証で身分確認も出来る」

河内 「看護学校のほうにも話してみたらどうかしら」

鍛冶山 「そうよね、学校に避難している人たちやお年寄り、それに子供たちのケアをしてもらえたらいいわね」

和泉 「そうしたらその子供たちの食事は、私たち給食給水班で炊き出しをやるわよ、ねえ中原さん」

中原 「そうよ、この会館に食べに来てもらえばいいのよ」

丸山 「学校と町内の交流もはかれるしな」

岡田 「会長、この話は進めてください」

石川 「わかった、早速大学のほうに話してみる」

鍛冶山 「そうだったら食料費は町内会から出していいですね」

石川 「もちろん、食費はかまわないだろう。しかし大学に話すには、具体的に何をしてもらうのかきちんと決めておかなければな」

岡田 「そうすると、最初の話に戻っちゃいますね」

丸山 「被災者のニーズの把握ですね」

石川 「そう、出来るだけ簡単にして現状が確認できればいい」

岡田 「思いつくままに項目を言ってみてください、このパソコンで調査用紙を作ってみますよ」

石川 「住所、氏名、電話も必要かな、それと家族の安否だな、けが人や病人、介護が必要か、手伝いを必要とするか、必要ならその内容。後は主な被害状況かな」

岡田 「（確認するような調子で）項目欄と記入欄に分けて、住所・氏名・電話は空欄。家族の安否欄は、全員無事・けが人病人はそれぞれ人数と症状を書く、要介護は人数と寝たきり・車椅子・その他に状態を書く、手伝いが必要かの欄は、必要と不要、どちらに該当してもその理由を内容欄に書く。記入欄の該当するものに○をつける。最後に主な被害状況、ブロック塀が倒れたとか瓦が落ちたなど・・・こんな感じですかね」

石川 「いいんじゃないかな、欄外に組長さんへ至急提出することって注意書きを入れてくれ」

河内 「知的障害者とか認知症とかの支援は？この間話し合ってたじゃない」

大山 「書き込む人がいるかしら」

丸山 「必要ないんじゃないか、プライベートなことだよ」

河内 「でも、専門のボランティアをお願いするとき必要じゃない」

大山 「内容を見て個別に聞き取りしたらいいわよ、それからお願いするの」

河内 「そうかな、非常時なんだから早く情報がほしいんですよ」

石川 「非常時だからこそ出来るだけ個人情報を守ってあげたいんだ」

岡田 「そうですね、個人情報いらないでしょう。天神町の被害状況では、倒

れたブロック塀と壊れた家具なんかのごみ処理が主な仕事になるでしょうからね」

中原 「生ごみもよ、停電で冷蔵庫が止まっちゃったから中身を全部出したの。回収に来る回数が減っているからね」

和泉 「普段のときみたいに大きく開けちゃだめなのよ、少しあけてさっさと出すの。冬場だから二日三日はもつわよ」

中原 「主婦の知恵ね」

石川 「ごみ処理といえば、粗大ごみなんかの仮集積場はどんなぐあいだい」

岡田 「震災の後は、みんな家の前に出していたんですが、道路が通れなくなるので、一丁目は丸山さんの裏のブロックにある空き地に、それと二丁目と三丁目の境にある畑に運んであります。いまま各自で持ち込んできますが、市役所のほうで本格的なごみ処理が始まるまで、佐川工務店の協力で重機を使って整理しています」

石川 「じゃ乱雑にはなっていないんだね、地主さんや近所の人たちの迷惑になつてはいけないからね」

丸山 「工務店さんは、震災直後から本当によくやってくれていますよ」

岡田 「燃料が続く限りフル活動だ、なんていってましたからね」

石川 「災害が起きたときには、人も機材も地域にとつて重要な資源だからな、感謝しなくちゃ。おや、もう三時過ぎか。岡田さん、調査用紙はそれでいいから急いで印刷して各組長に配ってくれないか」

岡田 「わかりました、全世帯に配布ですね」

石川 「そう町内全部だ。知らなかったというような人がいないようにしたいからね。皆さんも時間があるなら岡田さんに手を貸してやってくれないか」

山田 「いいわよ、何からはじめる」

大山 「私も手伝うわ」

河内 「近くの組長さんには取りに来てもらおうよう電話するわ」

丸山 「すぐ出来るのかな、それなら一丁目の分は持っていくよ」

大山 「印刷できたら、組ごとに分けなきゃ」

河内 「手分けすれば早いわよ」

鍛冶山 「時間があるから私もやるわ」

岡田 「よーし、プリントアウトできた。さあコピーするぞ」

皆ガタガタうごきだす。

石川 「ごくろうさん、私はこれから市民センターに行つて来る、その後小学校の避難所にいますから何かあつたら携帯に連絡してください。後は頼みましたよ」

河内 「ハイ、いつてらっしゃい」

コピー・裁断機で紙を切る音。枚数を数えたり、机の上でトントン紙をそろえる音などにぎやかになる
軽やかな感じの音楽が流れてくる

このドラマは住民はじめ行政など地域のさまざまな関係者が協力して災害時に想定される事態や対応について話し合い創作されたフィクションです。ドラマのシナリオづくりの過程では、地域社会の実態を調べ、かつ、行政の防災計画や防災体制、被害想定、ハザードマップ、マニュアルなどの公式な情報を参考にしていますが、社会的なシミュレーション（模擬演習）として、また、今後の改善の視点を盛り込むなどの理由から意図的に事実と異なる設定をしている場合があります。

● 六会天神町には、平時の連絡網として存在する自治会の班組織があります。またこれとは別に住民有志による自主防災組織が結成され、活動を行っています。また六会地区では各地区の防災組織が連帯して活動している六会防災リーダー会が結成されていることが地域の大きな特徴となっています。六会防災リーダー会は各町内の自主防災組織からメンバーが選抜されて六会地区全体の防災訓練や防災講習などの取り組みを行っており、実際の災害時には地域連携にも何らかのかかわりが出てくると思われるですが、今回のドラマは天神町という単一町内会での取り組みに絞ったものとしたため、六会防災リーダー連絡会の活動については描かれておりません。

● 第2話では高齢者を一時的に収容する施設として関係者が老人会館に詰めるというエピソードが語られますが、老人会館は実在の施設ではありません。また天神小学校に隣接するグリーンライフ湘南という特別養護老人ホームが登場します。こちらは実際に存在する施設で、ドラマの中で語られている通り六会地区の防災訓練にも参加され、人的交流が図られています。地域的には六会地区ではなく南側の善行地区に所属し

ます。災害時に地域の福祉施設と連携を図るために何をしておくべきかは、今後重要な課題として地域で検討されることになっていきます。

ストーリー3 終わり